

センター漢文解説速報

昨年度の漢文はかなり難しかったので、その反動で易しくなることが予想されていたが、その予想どおり標準よりやや易しいレベルとなった。問3と問6が若干難しかった他は、設問も比較的易しく、平均点はかなり上がると思われる。

【書き下し文】

楚人は虎を謂ひて老虫と為し、姑蘇の人は鼠を謂ひて老虫と為す。余、長洲に官し、事を以て婁東に至り、郵館に宿す。燭を滅し寝に就くに、忽ち碗礫羞然として声有り。余、故を問ふ。閻童答へて曰はく、「老虫なり」と。余は楚の人なり、驚錯に勝へずして曰はく、「城中安くんぞ此の獸有るを得んや」と。童曰はく、「他獸に非ず、鼠なり」と。余曰はく、「鼠何ぞ老虫と名づくる」と。童謂ふ、「呉の俗に相ひ伝ふると爾のみ」と。嗟嗟、鼠老虫の名を冒し、余をして驚錯して走げんと欲せしむるに至る。良に笑ひを發するに足れり。

然るに今、天下に虚名を冒し俗耳を駭かす者、少なからず。堂皇の上、端冕垂紳し、印累累として綬若若たる者、果たして能く邪萌を遏め、権貴を折き、豪強を摧かんや。牙帳の内、高冠大剣して、左に鉞を乗り、右に纛に杖る者、果たして能く群盜を禦ぎ、北に虜を遏め、南に諸夷を遏むること、古の孫呉起翦の儔のごとくならんや。驟に其の名を聆けば、赫然喧然たること、老虫に異なる無きなり。徐ろにして挟む所を叩けば、止だ鼠技なるのみ。夫れ鼠技を挟み、虎名を冒し、民の上に立つ者、皆鼠輩なるに至りては、天下の事大いに憂ふべからざらんや。

【現代語訳】

楚の人は虎を老虫と呼び、姑蘇の人は鼠を老虫と呼ぶ。私は長洲に赴任して、用事があつて婁東の町に至り、宿屋に泊まった。燭（ランプ）を消して床に就いたところ、突然食器類がガタガタと音をたてた。私が理由を問うと、宿の門番の少年は「老虫です」と答えた。私は楚の人なので、驚愕にたえず、「街中にどうしてそんな獸がいてよかるうか」と言う。少年は、「そんな獸ではありません、鼠です」と言った。私が「鼠をどうして老虫というのか」と聞くと、少年は「呉地方の俗ではそのように言い伝えているのです」と答えた。ああ、鼠が「老虫（虎）」の名をけがし、私を驚かせて逃げようとさせるまでいたるとは！まことに人の笑いをとるにはもってこいの話だ。

ところで今、天下には空虚な名聲ばかりで俗世間の耳を驚かす者が少なくない。国政の場で、威儀を正した礼装に、官位を示す印や綬をじゃらじゃらさせた者たちが、果たして邪悪の芽を摘み、権威や貴顕をくじき、強豪を破ることができようか。軍陣の内、冠に大剣を帯し、左手に鉞をとり、右手で軍旗を突き立てた者たちが、果たして群盜を防禦し、北や南の異民族から防衛することを、古の孫子・呉子・白起・王翦のような名将のようにできようか。ぱつと彼らの名声を聞くと、輝かしく賑やかなことは、まるで老虫（虎）に異ならない。しかし、じつくりと身につけているものを問えば、ただ鼠程度の技ばかりである。いったい鼠の技を身につけて、虎の名をけがして、民の上に立つ者が皆鼠のような輩ばかりであつては、天下の事を大いに憂えないでいられようか、いや憂えずにはいられない。

【読解のポイント】

まずさつと一読して、センター定番の二つの部分からなる文章であることはわかる。そこで前半と後半の関係を考えると、前半は筆者の体験した「老虫」をめぐる笑い話である。後半の段落は、おなじみ「話題の転換」の「今」とあつて「天下に」と始まり、「天下の事大いに憂ふべからざらんや」と反語で結んでいるから、こちらが主題であることは一目瞭然である。とすれば、前半の笑い話は、後半の主題に対する「譬喩・例話」になつていとわかる。

前半は、「老虫」という言葉が、楚では虎を指すのに対し、呉では鼠を指すところから、夜中の物音の原因を「老虫です」と言われた筆者が、虎かと思つてビビつたという笑い話。「老虫」という名前にビビつたが、なんのことはない実は鼠だったというところがポイント。「名」という言葉には、「名前」という意味の他に「名声・名譽」という意味があるのは、授業中何度も強調してきたとおり。そこから、後半の「名声」は虎のようなだが、「実力」は鼠並みの連中に対する批判へとつながつてゆくことがつかめれば、読解は完璧だろう。センターの常道として、ここが押さえられれば、高得点は間違いがない。

【設問解説】

問1 定番の漢字熟語を選ぶ設問がくるだろうという私の予想はずれでした。ただの「読み」を問う設問へと、大幅にやさしくなつた。

(ア)「忽」は何度もやつたように「たちまち」で「急に、ふと」の意。(イ)「不勝」も授業や講習で「試験に出るから読みだけ憶えておこう」と言つたとおり。否定の形で出題されたら「たへず」で決まり。

問2 落ち着いて考えればやさしい。aは宿屋の門番が答えており、あきらかに「鼠」で、②③④が消える。bは「鼠が老虫の名を冒し」ているので、「鼠」ではありえず「虎」。「冒す」は「冒涇」という熟語を考えればわかる。で、⑤⑥が残る。最後のcがやややむずかしい。高位高官や將軍たちについて「其の名を聆けば、赫然喧然たること、老虫に異なる無きなり」と言つているので、名声が「鼠」では変。「赫」は文字通り「赤」の二乗で、「あかあかと光り輝くさま」、「喧」は「喧伝・喧噪」でわかるように「かまびすしいさま」。

問3 Aは、何度もやつた基本の問題。まず「城」はもちろん「街」のことで②④が消える。ついで「安得・・・」は毎度おなじみの反語形、「いづくんぞ・・・するをえんや」(どうして・・・できるだろうか)。つまり「どうして町中に虎がいてよいだろうか」となつて③が選べる。

Dは、やや難。まず「徐」は「おもむるに」で「ゆっくりと」の意だったので②③④は消える。「挟む所を叩く」は前後の文脈から判断しなければならぬ。全選択肢が「・・・みると」で終わっているの、すぐ下の「止だ鼠技なるのみ」がヒント。その下に「鼠技を挟み」とも言つており、「挟む」のは「性格」ではなく「技量」であると見当がつく。

問4 一見難しそうだが、私の授業を受けた諸君なら楽勝だったはず。全選択肢が「余をして」で始まり、(使役形)であることはあきらか。

(使役形)で迷つたら「使+A+B」(AをしてBせしむ)のAとBは意味上の(S+V)であると考えればよい、と繰り返し教えてきた。そこで「余驚錯欲走」を考えてみよう。「欲走」(走げんと欲す)の主語は何か。当然、「私が驚いて逃げようとした」のでなければおかしい。とすれば、(使役動詞)「使」は「欲走」までかかつていなければならぬ。よつて②と決まる。

問5 傍線部の意味を問うているのではなく、文章読解の問題。この手の設問は、必ず前後に別の言葉で言い換えているか、詳しく説明している部分があるので、そこをヒントに考える。当然ここは後に続く部分。「邪を止められない高位高官」や「盗賊を防げない將軍」など、名ばかりで役に立たない連中のことを言つているとわかる。よつて①。

問6 定番の文章の内容に合致するものを選ぶ設問。これも、何度か練習したとおり、消去法が基本。文章の内容と合わないもの、文章では言っていないことまで書いてあるものを消してゆく。①はすぐ確定すると思うが、⑥の方は若干難しかったかもしれない。後半の段落で述べられている「虎の名を冒す鼠」のような高官や將軍は反面教師なのであり、それをそっくり裏返せば、筆者の理想とする高官や將軍となるわけである。